

開催地名：高知県室戸市	
開催日時	令和2年1月22日（水） 13：30 ～ 15：30
開催場所	室戸市役所
語り部	宮本 英一 （千葉県旭市）
参加者	市職員 約 50 名
開催経緯	東日本大震災から年月が経ち、職員間での防災意識に隔たりが見られ、どこか他人事のように感じている職員が見受けられる。今一度、東日本大震災の体験談や教訓について話を伺って、防災意識の向上を図りたい。
内容	（１）はじめに 旭市は千葉県の北東に位置し、醤油と漁業の町、そして以前は甲子園出場の常連だった銚子商業高校がある銚子市の隣である。平成17年7月に、旭市、飯岡町、海上町、干潟町が合併してできた、人口66,500名の市である。私は合併前、飯岡町の職員で、大震災の二年前までは皆さんと同じ市の職員だった。3.11震災当日は、90世帯ほどの地区の区長をしていた。 亡くなった方々は14名、行方不明者は2名で、津波で亡くなった方々や行方不明者の多くは、一度目の堤防を越えた津波の時は避難していて、もうこれで終わりだと思い、二度目の堤防を越えた津波で流された方々だ。これを機会に、「津波は繰り返しやって来る」と言うことを知っていただければ幸いである。また、震源地からかなり遠い千葉県でも、津波による大きな被害があったことを知って頂ければと思う。 （２）津波の恐怖 チリ津波が来て以来、この日まで「津波警報」や「注意報」が数え切れない程発令されたが、大抵は数十センチメートル海水面が上がる程度だった。九十九里浜は東北地方のリアス式海岸と違い広い海岸なので、津波の力も分散され、大きな津波は来ないと思い込んでいた。 従って、荷物を持って避難して行く人達にも「大丈夫だよ、堤防を越えることはないでしょう」などと言っていた。幸いにも私の地区では亡くなった方はいなかったが、避難して行く人達に、無責任にそう言ってしまったことを、今でも後悔している。 1回目の津波は、私の予想通り家の前の堤防を越えなかった。しかし、1回目の津波から1時間半後に、2回目の津波がやってきた。津波はザブーンと堤防を越えて、またたく間に辺り一帯を水浸しにした。私たちはとっさに、家の脇に隠れたが、アッという間に、津波の激しい流れに巻き込まれて、水の中に沈んでしまった。私たちは津波に流されながら、大声を出して励まし合った。木造の家と

コンクリートの建物に挟まれた屋根の残骸が見えた時に、妻と一緒に無我夢中で屋根の上に登ることができ、何とか助かった。

（３）震災発生後

ボランティアの依頼については、被災した本人が実際に社会福祉協議会に行って、手続きをしなければならなかった。ボランティア保険への加入の手続きの件もあって、受付に大変と時間がかかり、受付会場には、現場に行けないボランティアの人達が溢れていたという。

また、当初ボランティアの皆さんは徒歩で移動していたので、どうしても被災現場に着くのが遅くなったり、また、活動の時間的な制約もあって、実質的には、何時間も活動できなかった。そのような状況を見て、サーファーの方々は「私達はこの地域の海にいつもお世話になっているので」と言って、ボランティアの受付を通さず、私の地区の中に来て一生懸命手伝ってくれた。

津波によって恐怖を味わったことと、家族が無事だったことにより、改めて命の大切さを知った。最後になるが、大きな災害が起きると、個人や地域で想定しなかった様々な問題が起きる。ここにいる皆さんは、災害が起きた時に地域の皆さんのために、指導的な役割をする方々だと思うが、自分自身や家族の皆さんが被災者になる場合も十分想定される。万が一そうなった場合、家族や自分の命を守りながら、地域の皆様のためにどういった行動をとったら良いか、日頃から考えておく必要があると思う。



開催地より

東日本大震災の被災経験をふまえた本日のお話は、非常にわかりやすく、災害の体験・教訓に関する事について理解も深まったと思う。